

「もう、すべて 許したから…」

お母さんは家族の名ドライバーです

志茂田景樹 ファミリー

今、志茂田景樹ファミリーがアツい！
豊富な人生経験から湧き出る生きるための指針が
ツイッターや著書で若者にも人気となっている
景樹さん。日本にタクシーが登場してから100年目に
現れた年収800万円を稼ぎ出すカリスマ
タクシードライバーとして各種メディアに引っ張り
だこの二男、大気さん。しかし、ファミリーがここに
至るまでの道は平坦ではなかった。
「当時、あの人が女の人のもとに走って、家に帰ら
なかつたころ、私は怒りと恨みのなかに暮らして
いました。自殺未遂もありました。子供にも、
当たっていたというのでも、自分でもわかっています。
当時のことを思うと、ゾツとする自分がいいます」と
光子さん。80年、直木賞作家となったものの、不倫で
家庭を離れた夫。家庭を嫌い海外に向かった長男。
ある日突然事件に巻き込まれた二男。
そんな3人を許し、見守り、育み続け嵐の日々を乗り
越えてきた光子夫人が今だから語る。
受賞から33年。遠回りしたからこそ見えた景色。
そして、4人のこれからは……。

「ご乗車、ありがとうございます！
ます！ どちらまでまいりま
すか。はい、六本木ですね。
かしこまりました」

一路、目的地に向かって走
りだしたタクシーが信号で停
車したときだった。客が、ド
ライバーに向かって言う。

「運転手さん。もしかしたら、
あの志茂田景樹さんの息子さ
んでしょう」

「はい。わかりましたか」

「だって、顔立ちも赤い髪も
そっくりじゃない」

その後、目的地まで、'90年

リズ 文間

No.2120
題字 / 武田双雲

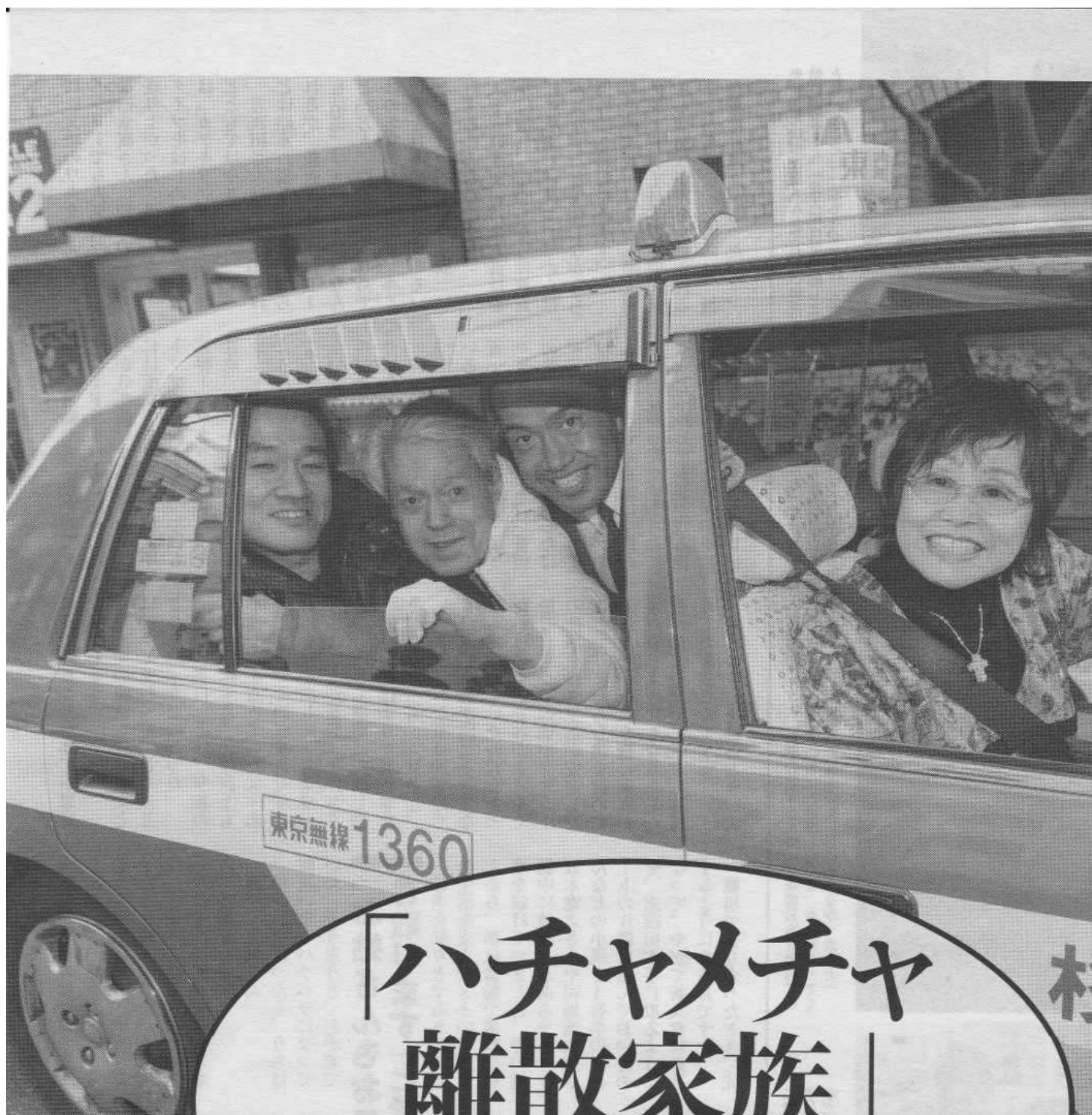
右より

母・下田光子さん (64)

二男・タクシードライバー 下田大気さん (36)

父・直木賞作家 志茂田景樹さん (72)

長男・カメラマン 下田順洋さん (40)



「ハチヤメチヤ
離散家族」
再生までの33年

代に文壇のワクを超えてワイドショーでも人気者だった志茂田景樹さん(72)の話題で盛り上がった。当時、カラータイツをはじめ個性的な衣装は、カゲキファッションなどともてはやされた。

志茂田さんは、ここ10年ほどは絵本の読み聞かせで知られるが、最近ではツイッターも話題。フォロワーは、なんと25万人。直木賞作家ならでの名文のツイートは、多くの人を日々感動させている。

たとえば、「不倫や二股」に對するこんなつぶやき。

「そういう関係になる前は愚かに憧れ、なってからは無責任に耽溺し、終わってからは本気だったと美化しながらも傷の深さに悔やみます。」

その志茂田さんの二男でタクシードライバーの下田大気さん(36)が声をかけられることが多くなったのは、彼自身にも理由があった。

光子さんは志茂田さんが売れない時代に働いて支えた。「愛人問題で離婚しようと思ったことは一度もなかった」と語る



「僕も女房にとっては子供の一人かも。下田光子という女性には僕たち男家族にとって絶対的なお母さん」と志茂田さん

長男の順洋さんは「7年間日本を離れていていちばん後悔したのは、かわいがってくれた祖母の死に目に会えなかったこと」

二男の大気さんはタクシードライバーの奮えを元手に新宿・歌舞伎町で子供のころからの夢だったラーメン店経営も実現させた

芸能活動や実業家を経てタクシードライバーに転身したのが3年前。すると1カ月後には所属するグループ300人中トップの成績を上げ、年収も業界トップクラスの800万円を達成。いつか「カリスマタクシードライバー」と呼ばれるようになり、初めての著書「タクシードライバーは気楽な商売はない!」(光文社刊)を出版し、再びマスコミにも登場するようになったのだ。

カリスマとしての証明の一つが都内の道を知り尽くしていること。昨年末に出演し「近道」を披露した「ゴロウ・テラックス」(TBS系)では、番組の最高視聴率を叩き出したほど。いわば志茂田ファミリーは現在、父子で再ブレイク中。「まあ、うちの家族は空白の期間が長かったですからね。今、こうやって両親が読み聞かせをして一緒に日本中を旅していたり、僕がまたテレビ

に出ていること自体、不思議な気がします」

今までの快活な受け答えとは打って変わって、しんみりとした口ぶりなのだ。

この「空白」とは、家族の不在を意味する。10年以上も不倫で家を空けていた父・志茂田さん。その父を許せずに日本を飛び出して7年間帰ってこなかった長男・順洋さん(40)。そして事業に失敗し自己破産したばかりか暴行事件を起こした二男・大気さん。

「つまり、わが家は20年近くも、家族全員が問題を抱えながら離散していた時代があったわけです。それがようやく最近、末っ子の僕がタクシードライバーの仕事を得て生活が安定したことで、父たちも僕を認めてくれたし、それを機に家族がまた集うようにもなりました。その意味じゃ、ずいぶん遠回りした家族なんです」

気さんが思うのは母親・光子さん(64)の存在だ。どんなときも家庭にあり、夫を、息子たちを待ち続けた。そして今、光子さんはこう語る。「今はもう、すべて許したから、感謝なんです」

再び、大気さん。

「母がいなかったら、うちは間違いなくバラバラになっていた。そう思うと、わが家で

「お姑さんもお子さんも私が引き取ります」と愛人から電話が

「仕事を転々とするあの人の生活を支えなきゃいけませんから、私は常勤で事務の仕事が続けていました。その通勤中に読む本があるでしょう。五木寛之さんや司馬遼太郎さんなどの小説を4畳半のアパートの片隅に積んでおいたのを、志茂田が手に取るようになって、やがて新人賞に応募するようになるんです」

職場で知り合ったとき、光

一番の名ドライバーはお母さんなんですよ!でも、なんで、うちの両親は離婚しなかったんだろ?」

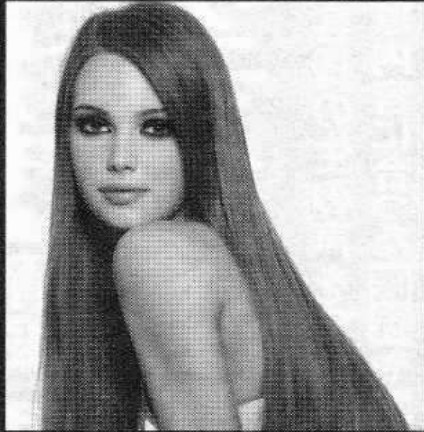
これまで取材を一度も受けたことのない長男の順洋さんにも会えるかもしれないという。4人が全員そろっての取材が実現すれば、そのまま家族史の「空白」を埋める道のりとなる予感もあった。

「大らかな温かみのある人でした」

1969年春に結婚。3年後に順洋さん、その4年後に大気さんが生まれた。

「生活は、はつきり言って、貧乏でした。3畳の部屋で主

バラは美しく咲くのではない。
一生懸命咲いているから
美しいのだ。 映画「ライムライト」より



しわたるみくまでお悩みの方
抗加齢治療法

●施術当日から洗顔、お化粧もできる注入法
ヒアルロン酸 10,500円(0.1cc)、ボトックス 31,500円
●目の下のくま・たるみ・しわ
終結膜脱脂法、下眼瞼切開法、下眼瞼切開ハムラ法
●たるみ・しわ
切らないフェイスリフト(スレッドリフト)→フェザーリフト、マジックリフト、ナチュラルリフト、ホワイトリフト

輪郭形成術 国内有数3,000件以上の症例
※00年2月～12年9月調べ

●頬骨・頬幅が大きい頬骨が気になる方
頬骨の横への突出は内方転位で最大約2センチ小さくします。 1,260,000円～1,575,000円
●エラー 四角い輪郭を卵型の小顔にしたい方
正面顔の頬幅を約1.5～2センチ小さくします。 1,260,000円～1,575,000円
●顎一線が長い、顎が大きい方
2段水平骨切り術で最大で約1～2センチ短く、約8ミリ～1センチ後退させます。限りなく滑らかな曲線に仕上げます。

鼻形成術 豊富なヴァリエーションで自由自在

●鼻中隔延長術-構造から変える構造鼻形成術 840,000円
●鼻尖縮小術-団子鼻を小さくシャープにしたい 315,000円～525,000円
●鼻尖縮小術、隆鼻術

目もとの手術 大きな瞳にする手術

●二重埋没法(SMK法)-戻りにくい二重にしたい 63,000円～198,000円
●拳筋タッキング法・拳筋短縮法-黒い瞳を際立たせたい
●下眼瞼下制術-優しいな垂れ目にしたい
●目頭切開法-目頭側のまつ毛ラインに丸みをもたせたい

リッツ美容外科

0120-628-662

<H.P.> <http://www.ritz-cs.com/>
<Mail> info@ritz-cs.com

東京・名古屋・大阪・高松

診療時間: 10:00～19:00 / 完全予約制 / 年中無休
公的保険は適用されません。治療費は標準的な費用になります。



東京院が場所を
恵比寿に移し、
グレードアップして
オープン!

東京都渋谷区恵比寿南1-7-8 恵比寿サウスワン 2F

リズ間

人が原稿を書いて、隣の6畳で子供たちが遊んでいて。でも、今考えたら、あのころがいちばん幸せでした」
「黄色い牙」で念願の直木賞を受賞したのが80年。
「そりゃ、うれしかったですよ。でも、すぐに私の友人から言われたんですよね。『あなた、これからが大変よ』って。まさか、あんなに早くその警告が現実になるなんて」
直木賞作家となって、すぐ

「それから、怒りと恨みのなかで暮らしていました」
あるときは、愛人からこんな電話がかかってきた。
「お姑さんもお子さんも私が引き取りますから、別れてあげてください」
光子さんはガチャンと電話を切った。息子の誕生日に家族で祝おうとレストランを予約。このときはばかりは志茂田さんも一時帰宅した。そ

に編集者たちと飲み歩く日々が始まった。店は近所の居酒屋から銀座の高級クラブに変わっていた。
「最初におかしいなと思ったのは、自宅の近くにもうけた事務所を、すぐに線路を挟んだ向こう側に引っ越したいと主人が言い出したとき。すでに女性がいて、少しでも自宅から離れたかったんですね」
夫が家を出たのは、直木賞受賞の翌年だった。

「それからは、怒りと恨みのなかで暮らしていました」
あるときは、愛人からこんな電話がかかってきた。
「お姑さんもお子さんも私が引き取りますから、別れてあげてください」
光子さんはガチャンと電話を切った。息子の誕生日に家族で祝おうとレストランを予約。このときはばかりは志茂田さんも一時帰宅した。そ



結婚直後の志茂田さん夫婦。光子さんは「あなたはきっとできる」と夫が小説を書くことを支えた。「貧乏だけど幸せでした」

「当分の時間の感覚がないんです。私を普通の生活につなぎとめていたのは、子供の存在です。私が父親の役目もしなければ」と言い聞かせながら暮らしていました」
このころ、『塩狩峠』を読んで著者の三浦綾子さんに手紙を書いたことがきっかけとなり、光子さんはクリスチャンとなった。そんな彼女がもう一つ、子育てで決めたことがあった。
「男の子にとって父親は絶対的存在ですから、子供の前



大気さんが2歳のころ。父が家を出たあとも、反発した兄と違い、父のことが大好きだった。高校のころには父とテレビ共演をするようにも

悪口は決して言いませんでした。女性のことも知られてはいけないと思い、「お父さんは外でお仕事をしている」と言い続けました。それでも子供は感じ取るものです。直木賞のときまだ4歳の大気はわからないと思うんですが、すでに小学生だった順洋は父親の変化にも気づいていたと思うんです。その反抗期はすさまじくて、あの子が私に言っ



『よい子に読み聞かせ隊』の活動もまもなく15年。「いつとも同じ場面で泣きだすほど感情を込めて語る主人です」

「言葉は今も忘れません」
中学生のころのこと。口論
となったとき、光子さんに向
「物心ついたときには、もう
家に父がいなくて。そのうち
兄貴も高校の途中から海外へ
行ってしまいました。でも、

失敗続きの 대기さんが見つけた天職。「タクシー」は夢をかなえる手段

かい、長男はきつい表情でこ
う言い放ったという。
「直木賞なんかいらさない」
僕は父のことが大好きで、月
に1、2回、帰宅するのがす
ごくうれしかった。親父から
勉強でも遊びでも、怒られた
り意見された記憶はまったく
ありません」
 대기さんは言う。だから志
茂田さんが91年に『笑ってい
いともし』に出演するようにな
って関係者から共演を持ち
かけられたとき、中学生だっ
た彼は迷わずに承諾した。
「体もデカかったから、父親
が有名でイジメられたこと
もなく。目立つのも好きだ
つたので、ここは父親の存在
を利用してやろうくらいのも
りでした」
私立高校へ進むと、やがて

ビューティー
相談室

美容整形

情報・相談
センター

クリニック選びは慎重に賢く!!

お客様の生の声を反映させ、それぞれの
治療内容に合った【医院や医師を】ご紹介します。



治療・手術経験の
ある方も
ご相談ください。

プライバシー厳守

相談無料

お腹・腰まわり痩せ

バストの張り・ボリューム

顔のたるみ

部分的しわ

シミ・くすみ

目元のタルミ

ワキガ・多汗症

切らないリフトアップ

全国ネットワーク

どこからでも、無料でご相談・ご情報紹介。
※認定医療機関対象

お問い合わせは(携帯・PHS対応) キュートなコは キレ

フリーダイヤル **0120-975-901**

相談受付時間 / 10:00~19:00 年中無休 東京都港区新橋1-11-3
http://soudan-go.com

渋谷のチーマーとなる。
「このときも、パーティのゲ
ストに父親を呼んで盛り上げ
たり。親ですから、出演料は
当然タダでした(笑)」
そして高3のとき、矢沢永
吉主演のドラマ「アリよさら
ば」へ俳優として出演する話
が動きだす。しかし、結果と
して、この役者デビューは失
敗に終わる。
「台本も真剣に覚えなくて、
プロデューサーからどんどん
セリフを削られていきました」
高校卒業後、起業して健康
食品の通販会社を始めた。こ
れを1年で閉じたあとも父親
の付き人や宝石の販売代行会
社にも手を出す。最後は2
千300万円の借金を作って自己
破産となる。都内で暴行事件
を起こし裁判となったのもこ
のころ。

立ち上げた芸能事務所も、そ
の後のパーの経営も失敗。な
んだか、どれも中途半端でや
っていたのが、33歳のときに
タクシーと出合いました」
先述したとおり、すぐにカ
リスマドライブパーと呼ばれる
ようになるが、このとき役立
ったのが、これまでの「中途
半端」にしか思えなかったさ
まざまな体験だ。

「高1の原チャリに始まり、
親父の付き人で運転もしてま
したから、都内の道は知り尽
くしていました。いろんな職
種を経験し、自分が遊んでい
た時期も長かったから、どこ
にどんなお客さんがいるとい
うデータも完璧に頭に入っ
て」
「女房が家を守った。そのことに
罪の意識はありました」
「作家なのに派手な衣装でテ
レビに出る父が嫌で、僕は心
を閉ざしました。それで17歳
いたんです」
現在は禁酒とジム通いで体
力を維持し、さらなる目標に
向かって歩みだしている。
「タクシーは、夢をかなえる
手段」というのが僕の持論。
夢を持ってない若い人に、ぜひ
タクシーをステップにして真
の夢を実現してほしい」
会社のワクを超えたドライ
パーの集まりを主宰。若いド
ライパー志願者たちに惜しげ
もなく自分のノウハウを伝授
している。人と対面して話す
には必要と考え、最近、カウ
ンセリングの学校にも通い始
めた。カリスマと呼ばれる裏
には、そんな地道な努力の積
み重ねがある。

で家を飛び出してアメリカに
24歳までいました。でも、海
の向こうで一人になって、や

リズ間

つと家族から解放されたはずなのに、考えるのは家族のことばかり。「お袋もつらかったろうな」って、初めて自分はその家が大好きなことに気付くんです」

あの「空白」の日々も自立のためには必要な時間だったと、取材場所の喫茶店に現れた長男の順洋さんは語った。父との和解をお膳立てしてくれたのも、また母だった。帰



直木賞を受賞した後に夫婦で首相官邸にて。公的行事をすませると夫は愛人のもとへ行ってしまいが、光子さんは信じて待ち続けた

国後は、フリーのカメラマンとして「YORRIZO」名義で活動を始めた順洋さん。「お袋が、父との取材旅行を企画してくれました。それで日本中の100歳以上のお年寄りを訪ねて歩いたんです。父が記者で、僕がカメラマンで。現場にいて、あることに気付くんです。取材相手と対面していて、僕が聞きたいと思っただことを、不思議に父が口にするんですね。ああ、やっぱり親子なんだ。実は似てたから反発も大きかったんだ、って知ってハッとしました」

とはいえ、今も両親とは面と向かうと素直になれないと照れ笑いする。

「この取材も、弟経由だったから『そろそろいいかな』と思って受けましたが、親からだったら条件反射的に『僕は出ない』と言ってたかも」

光子さんは、写真撮影のために家族4人が久しぶりにそろったとき、本当にうれしそうだった。その母には、息子たちとの忘れられない場面がある。たとえば、大気さんがチーマー時代のあの一日。

「大気たちのパーティにヤクザがやってくるという噂が耳に入ってきて、会場近くの建物の陰に身を隠して張り込みました。もし、そんな人が来たら、体を張ってでも中には入れない覚悟でした。真冬で寒くてね。もう、ブルブル震えながら待ちました」

もちろん、大気さん本人も何も知らずにやってきた。

「志茂田の真っ赤なスーツで現れましたよ(笑)。結局、不審な大人は来ないで、ホッとため息をついたとき4時間が過ぎていました。冷えた体を温めようと食べたラーメン

のおいしかったこと」

大気さんが暴行事件で裁判になったときも。

「すぐに弁護士のもとへ連れていきました。すると弁護士が『志茂田景樹さんが父親なんだから、裁判資金を出してもらえばいい』といった発言をしたんですね。したら大気は怒って、その後はいっさい弁護士には頼らずに、自分で法律の勉強をして2年間の裁判を闘い抜きました。」

言いだしたら曲げない頑固さは、まったく主人と同じ。

でも、私はその姿を見て、もう成人なんだし、この子に任せようと思えたんです」

大気さん自身は、父親不在の家庭で、いかに母親の存在が大きかったかを語る。

「うちは有名な家庭といっても、ふだんの生活はとても厳しかった。母は決して僕たち兄弟を甘やかさなかった。渋谷で遊んでいるころは、正直いんな誘惑がすぐ隣にありました。でも、僕の場合、一線を越えそうになると、いつも浮かぶのは2つ。父親の直木賞作家という看板と、母親の顔でした」

当の志茂田さん自身は、子育てをどう考えていたのか。

「僕は子供のとき病弱で、長兄を戦争で亡くしていたし、姉とは8つも年が離れていたもんだから、親から溺愛され

牧師さんと。「誰かのお役に立ちたい」との家族共通の思いは、母とともに兄弟も洗礼を受けていることと無縁ではない



て育ちました。遠足に両親が付いてくるほどで、僕はそれが嫌で嫌でならなかった。

ですから、自分自身が親となつて、子供に対して基本的には干渉しないというのは、僕の生い立ちからくるトラウマの反作用なんです」

光子さんが、父親の悪口をいっさい言わない子育てを続けていることも承知していた。

「もし、女房が僕の悪口を言っていたら、逆に気がラクだったかもしれない。でも、こんな僕でも待ち続けて、子供たちをしっかりと育て、家庭を守った。そのことに罪の意識はありません。だから家を出たといつても、ほかの惑星に行っちゃうような飛び立ち方はできなかった。見えない軌道があった。いつか(家族のもとに)戻るんだろうな、とい

グリーゼン

うことは常に頭にありました」
一人二役で家庭を守り続けた光子さんだが、息子たちに対して、一っだけ申し訳なきを抱え続けている。
「心では怒りと恨みを抱えな



母の最大の気がかりは家族の健康。夫婦の老後も切実な問題だが、「主人は100歳まで生きると宣言していますから心配はしません！」

がら、父親の悪口は言わず、そのうえ、自宅では志茂田の母親の介護で下の世話まで。そんなギリギリの状況なのか、つい厳しくしすぎて、アツ、子供に当たっちゃってるなど反省する場面が何度もありました。今、テレビで虐待のニュースを見るたび、昔を思い出してゾッとする自分がいるのも本当です」
取材は、東京・麻布十番にある志茂田さんの事務所で行われていた。母の言葉を聞いた大気さんが言う。
「そうそう。お袋からファミコンを投げつけられて壊れたこともあったな(笑)。でも

いつも思ってたのは、理由はよくわからないながら、お母さんも大変なんだなあ、ってこと。怒られていても愛情を感じていました……なんか、照れくさいなあ。ほんと、うちはずいぶん遠回りをした家族だけど、僕は遠回りもいいもんだと、そう思ってるよ」
つい昨晚のこと、テレビに登場して、得意気に「近道」を披露していたカリスマドライバーが、しみじみと「遠回りもよし」なんて言う。

読み聞かせが離婚を思いとどまらせたが、4人は二つ屋根の下に今いない

「お話の前に、『よい子に読み聞かせ隊』のメンバーを紹介します。僕が隊長の志茂田景樹です。隣にいるのが、下田光子おばちゃん。僕の女房でもあります」

子供たちに志茂田さんが自らの絵本などを読み聞かせる活動は、'98年にスタート。その前には事務所設立や出版部門の立ち上げもあった。愛人問題では別れようとは思わなかった光子さんだが、この会社運営をめぐっては、離婚を考える場面があった。
「主人から、『お前がいるから会社がうまくいかない』といった冷たい言葉がありました。そのときはさすがに別れるしかないと思いましたが、それを思いとどまらせたの

一家をタクシーにたとえれば、ドライバーは母親の光子さんだった。ときには夫の不倫に自暴自棄になったり、ときには子供に真剣にキレてしまったり、いつも安全運転ばかりとはいかなかった。
しかし、その胸にはいつも「母であること」の矜持があった。そのまっすぐで温かな思いが今日の穏やかな日々に至るまで、遠い道のりを辛抱強く家族をつなぎとめながら運んできたのだ。

「夫婦で日本中を旅しながら、ああ、やっぱり、この人の本質は変わっていない。そう確信できたんです。それは、家族も、たまたま隣人になった人も分け隔てなく愛することができる大らかな人間性です。愛人のもとへ行っている間も、その本質が失われない限り、私はこの人と別れないと決めています」

現在、愛人問題に悩むことはなくなり、家族が再生されたとはいっても、4人が「二つ屋根の下」で暮らしているわけではない。
東京近郊の志茂田さんの実家に暮らすのが光子さんと大気さん。そこから5分ほどの

マンションで单身生活をするのが順洋さん。志茂田さんは事務所週の大半を過ごし、週末に仕事や出張がなければ自宅に戻るといふ変則的な家族の形がある。
光子さんは、

「100組あれば、100通りの家族の在り方があると思うんです。今の主人との距離感は、私が何十年もかかってようやくたどり着いた最も心地よい間合いです」

最近の心配事ですか。191号と187号の大男の息子2人の結婚ですかね(笑)。もう、これは母の祈りです」

読み聞かせやツイッターを通じて若い世代を中心に発信し続ける父と母。カメラマンと同時に障害者雇用促進の仕事をする長男。そして若い世代のタクシードライバーと夢を共有しようと呼びかける二男。その大気さんが言っていた。

「ずっとバラバラだったはずなのに、うちの家族って、同じようなところを目指していたんだなあ、今になって思うんです」

気持ちはひとつに今、家族はそれぞれの新たな目的地に向かいハチャメチャに走り始めている。

取材・文／堀ノ内雅一
写真／木村哲夫